



# カズ君の おばあちゃん

---

—わたしや平気だよ—

---

榎 千恵

---

カズ君のおばあちゃんは、今年八十歳を迎えます。年のわりには、腰も曲がらず、白髪も少なく、（ちょっぴり薄くなったことは、気にしていますが）とっても若く見えます。

何より、カズ君にとっては、何でもわかる何でも知ってる、やさしいおばあちゃんですから、この元気いっぱいのおばあちゃんが大好きでした。

ある日のことです。おばあちゃんとママとカズ君の三人で、東京のほうにでかけたときのことです。買い物をしたり、おいしいものをたべたり、だいすきなアイスクリームを食べたりして、大満足なカズ君。

おばあちゃんは、ニコニコして、だいたい大好きなミニカーをいっしょに選んで、三台も買ってくれました。ママは、車のワッペンをついた洋服を買ってくれました。でも、カズ君にとっては、やっぱりミニカーが一番です。

あっというまに帰る時間になってしまいました。その時間は、ちょうど会社帰りの人たちで、ごったがえすときでした。カズ君は、人ごみのなかで、つぶされるのではないかと思いました。

東京駅まで、少し遠回りですが、ならんで乗れば、すわっていけます。カズ君は、ママとおばあちゃんとはぐれないように、していました。

その日は、思ったよりずっと混んでいたもので、時間がかかりました。でも、ならんで乗ったおかげで、ママがなんとか、三人分の座席をとることができました。カズ君は、やっとすわれて、一安心です。

電車が動き出し、次の駅に止まりました。

そこに、おばあちゃんより若そうだけど、腰がまがったおばあさんが乗ってきたのです。

おばあちゃんは、その人を見るなり、てまねきをして、「どうぞどうぞ、ここに」といって、自分の席をゆずってしまいました。

ママは、びっくりして、立ち上がったおばあちゃんを、あわてて自分の席にすわらせていました。

そのあと、カズ君は、おばあちゃんに聞いてみました。

「どうして席をゆずってあげたの？」と。

おばあちゃんは、いいました。

『わたしゃ、平気だよ。』

そうです。カズ君は、おばあちゃんのこのことばをよく聞くのです。おばあちゃんは、いつも人のことを考えてあげます。いつも人のことを、自分より先にやってあげるので、ママにしかられていません。

そうそう、この間も、こんなことがありました。みんなで回転寿司を食べに行った時のことです。

お寿司が流れるところに、お皿がぎゅうぎゅうのっていて、角のあたりにすわっていたおばあちゃんの前に、あふれたお寿司がお皿ごところがってしまったのです。お寿司をにぎっている人が、むりにお皿をいれたからでした。気がついた店員さんが、

「すみません」

と、言っただけでかたづけようとしたとき、おばあちゃんは、にっこり笑って、

「これいただきますよ。ちょうどよかった」

そう言ってお皿にきちんと入れなおし、おいしそうに食べてしまったのです。ママもパパもそんなおばあちゃんを見て、あきれた顔をしていました。

そのあと、カズ君は、おばあちゃんに着てみました。

「食べたいものじゃなかったんでしょ？どうして食べちゃったの？」と。

おばあちゃんは、言いました。

『わたしゃ平気だよ』

それから、こんなこともありました。お手伝いをしていたカズ君が、つまずいて、うっかりお客様用のお茶碗をわってしまった時のことです。

ママは、すごいこわい顔をして、カズ君のことを叱りつけました。

ところが、そばにいたおばあちゃんは、こう言ったのです。

「けががなくてよかった、よかった。それに、これでお茶碗屋さん所の子供が大きくなれるよ。

またママが買いに行くからね。カズ君のおかげだよ。」

それを聞いたママは、

「買ったばかりの高いお茶碗だったのよ！また買わなきゃならないなんて！」

と、ぷりぷり怒って、文句を言いました。

けれども、おばあちゃんは、もちろんこう言いました。

『わたしゃ平気だよ』

カズ君は、小さいころから、おばあちゃんといっしょに、お風呂に入って、昔のなつかしいおばあちゃんの子供時代の話や、戦時中の話をきかせてもらいました。物がなくて、たいへんなとき、爆弾がおちて、怖い思いをしたとき、勉強がしたかったのに、できなくなってしまったとき、おばあちゃんのそのときの気持ちが、カズ君にもわかる気がしました。物を大事にすることや、人の命がなにより大切だということを、おばあちゃんの話をおきくたびに、感じるのです。カズ君は、おばあちゃんの話をおきくのが大好きでした。

おばあちゃんは、なんでも、わかりやすく、きちんとわからないことは教えてくれます。ママが、だめだめということでも、おばあちゃんなら、ゆっくり手伝いながら、させてくれます。おばあちゃんは、カズ君が、なにかやったり、つくったりするたびに、いつもいつも「カズ君、がんばったね。」とほめてくれます。カズ君が、悪いことをしてしまった時も、すぐにママみたいに、怒鳴ったり、叱ったりしません。まず、カズ君のいいたいことや、どうしてそうしたか、聞いてくれるのです。それから、おばあちゃんは、

「考えて、それが悪いことだと自分で思ったら、まずは、あやまること。そして、二度としないことだよ。それができるんだから、カズ君は、ほんとうにいい子だね。」

おばあちゃんに、いつもいつもいい子だねといわれてしまうと、そんなふうにいわれるたびに、カズ君は、自分が、おばあちゃんのいうような、ほんとうにいい子になっていく気がしたのです。

こんなこともありました。おばあちゃんのすんでいる家は、もうなくなってしまったおじいちゃんが、建てたもので、だいぶあちこちいたんでいました。三十五年以上建っている一軒家です。

庭木や、壁や屋根を、長い時間をかけて直してもらった時のことです。四、五人の大工さんや瓦屋さんが、毎日入っていて、そのあいだおばあちゃんは、いそいそとお茶をだし、おやつをだし、にこにこしながら、大工さんたちにごくろうさまと、かならず声をかけていました。それだけでなく、おばあちゃんは、仕事をしにきた人に、こっそりたばこをあげたり、飲み物でものんでちょうだいと言って、帰りがけちょっぴりおこずかいをわたしていました。十時と、三時に、お茶やおかしをだしながら、たのしそうに話をしたりすることもありました。ママは、

「仕事をしてもらってるぶんは、きちんと十分にお金をはらっているのだから、よけいなことしなくていいのに・・・」

と、ごきげんななめです。いくらママがやめてといったところで、おばあちゃんは、こうやってやっているのです。

『わたしゃ平気だよ』

そのあと、カズ君は、おばあちゃんに聞いてみました。

「どうしておばあちゃんは、仕事にきている人たちに、たばこをあげたり、おやつをあげてりするの？」と。

おばあちゃんは、わらって言いました。

「職人さんていうのは、おなかがすくものさ。昔おばあちゃんのおかあさんも、そうやってあげていたんだよ。人によくしておくとな、かならずよくなってかえってくるものさ。かえってこなくたって、わたしゃ平気だけどね。」



それからしばらくして、カズ君は、おばあちゃんの家屋根をなおしたおじさんがやってきて、ママと話すのを、聞いていました。

「わかったですねえ。屋根だけでもていねいにやってもらって、ありがたいのに…。蜂の巣や鳩の巣なんかまで、いろいろ片付けてもらって…。そうそう古いこわれかかった留め金も新しくつけかえてあったって…母が言ってました」

ママがそう言うと、おじさんは言いました。

「いやあ、きもちよく仕事させてもらって、こっちこそ、ありがたかったですよ。気にしないでください」

おばあちゃんにくれぐれもよろしくと言って、おじさんは帰っていきました。

カズ君は、このときなんとなくですが、おばあちゃんのいっていたことが、わかった気がしたのです。

カズ君は、生まれてしばらくは、おばあちゃんの家でそだったのですが、カズ君のパパの都合で、いまは、ときどきしかおばあちゃんにあえないのです。今はおじいちゃんが建てたこの家に、おばあちゃん一人ですんでいます。カズ君は、いつかおばあちゃんと暮らしたいと思っています。だって、おばあちゃんは、なんでもよく知っているし、何か大変なことがあっても、おばあちゃんが、ふしぎにいつのまにか、なおしたり、解決したりしてしまうからです。どらえもんポケットも、いろんなものがでてきて、すごいけど、おばあちゃんのあたまも負けてないぞとカズ君は思うのです。

それに、カズ君が、おばあちゃんにくらしたら、やってあげたいのです。いつもいつも人のことが先で、自分のことを、あとでいいからいいからと後回しにする大好きなおばあちゃんに、一番してほしいことを、一番にしてあげたいのです。

ところが、そんなときです。カズ君のパパがお仕事の都合で、おばあちゃんの家から、もっとも遠くに引っ越すことになってしまいました。もちろんママは、家を処分して、いっしょに住もうといました。カズ君としては、とってもうれしいことです。それなのに、おばあちゃんは、パパとママがどんなにいっしょに暮らそうといても、たのんでも、首を横にふるばかりです。一人で暮らすといます。おじいちゃんの家から離れたくないのです。

そのあとカズ君は、おばあちゃんにきいてみました。

「一人で暮らすなんて、さみしくないの？」と。おばあちゃんは、こたえました。

『わたしや、平気だよ』

大好きな元気いっぱいのおばあちゃん...！

カズ君のじまんのおばあちゃん...！

なにがあっても、どんなときも、

『わたしや、平気だよ』

そうって、笑ったおばあちゃんは、もういません。いつかおばあちゃんと暮らしたいというカズ君の願いは、かないませんでした。

一人で突然、天国にってしまったのです。

カズ君は泣きました。カズ君のパパとママも泣きました。

遠くはなれて、たった一人で、逝ってしまったおばあちゃん...いっしょにくらしたかったのに...

カズ君は、大声でおばあちゃんを呼びました。そしてまた大声で泣きました。そうしたら、どこからか、おばあちゃんの声が聞こえたように思ったのです。

「カズ君、何泣いてるんだね？わたしや、平気だよ。」

そのとき、カズ君は、はっとしました。『わたしや、平気だよ』=このことばは、いつも元気で明るく、自分のことを後回しにしても、まず人のことを考え、大切にしてきたおばあちゃんだから、いえるのです。

そして、平気でいられるように、がんばってきたおばあちゃんだからこそ、いえるのです。

『わたしや、平気だよ』は、「わたしや、がんばれるよ」だったんだ！カズ君が、そう思ったとき、今度は、はっきりおばあちゃんの笑い声が聞こえました。

あれから数年がたちました。カズ君は、小学五年生になりました。カズ君に弟ができ、おにいさんになりました。ママのお手伝いをしたり、弟のめんどうもみています。おばあちゃんと、引越して別れるとき、ママのお腹に赤ちゃんがいるのを知っていて、おばあちゃんが言ったのです。「カズ君、ママは新しい場所で、これから大変になるからね。カズ君は、ほんとうにいい子だよ。きっとママのお手伝いをして助けてあげられるよね。約束だよ」

おばあちゃんとの約束ですから、カズ君はきちんと守っています。学校でも、カズ君は、みんなのためにやれることは、自分からやっています。ときには張り切りすぎて、失敗したり、たまにはいやなことや、大変なこともあります。

でも、カズ君は、そんなとき、おばあちゃんの大きな笑っている写真にむかって、こういうのです。

『おばあちゃん！

ぼくは平気だよ』って。



完